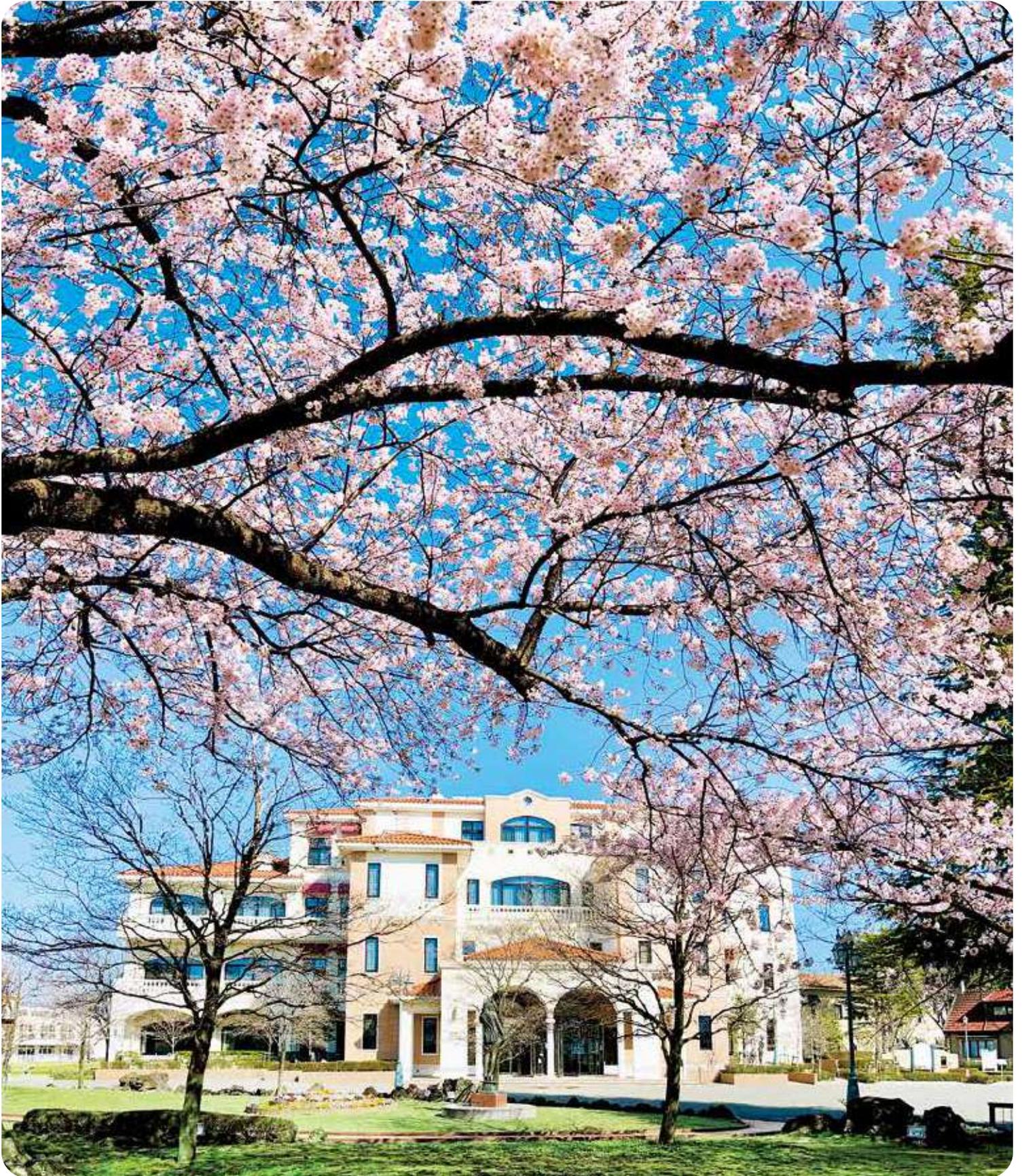




# 福島学院大学 大学報

VOL. **35**

福島学院大学 大学報  
<http://www.fukushima-college.ac.jp>



# 「ここにしかない学び」をめざして

## 〜知識から実践力へ〜

「公器」の姿を目指し、挑戦する姿勢で大学改革を押し進めてきた結果、昨年四月の新学部「マネジメント学部（地域マネジメント学科）」開設により、大きな一歩を踏み出すことができました。

本学に進学する学生の八割は福島県内出身者です。そして大部分の学生が地元に戻り就職しています。その地元が、福島県特有の避難指示解除区域であれ、全国的に問題となっている少子高齢化・人口減少が進む地域であれ、共通するのは人手不足・人材不足であり、いずれもそこに住む人がそこで住み続けられる地域の創生が課題となっています。

道半ばである福島の再生を支える人材、これからの地域を支える人材を育成することが、課題先進地といわれる福島にある本学の大きな役割と理解し、本学で学ぶ学生には課題の根源を探索し、幅広い

視野で解決できる知見を提供しなければならぬと考えています。困難な状況に直面しても、そこで「生きる力」「生き抜く力」を身につけていただくために、学問的な知識を教授するだけにとどまらず、さらに実践力につながる体験や経験をどれだけ与えることができるか、大学は問われていると感じています。

本学では地域連携センターを中心として、地域に目を向け、地域を知り、地域の今を実感できる「地域で学び、地域に学ぶ」学びの場となる地域連携活動を積極的に進めています。そのような中、本年四月にマネジメント学部の教授に就任した韓国の高教授の紹介により、昨年十二月に韓国の建国大学総長との懇談や仁荷大学において「ふくしまならではの学び」の講演をさせていただくなど、韓国の大

た昨年五月に行われたマネジメント学部開設記念シンポジウムにおいて「世界から見たふくしま」を講演していただいたUCLの大沼教授の紹介により、今年の三月にイギリスのペトロック大学の学生と教師を迎え、本学の学生とともに五日間にわたり復興の歩みを学ぶなど積極的な交流が行われ、本学の学生にとって大きな学びの機会を得ることができました。

さらに、本学の内山副学長・教授の大震災・原発事故の子どもたちの心への影響に関する研究「浜通りの子どもたちのメンタルヘルス支援」が、国内有名国立大学に混じって唯一の私立大学として国際教育研究機構（エフレイ）の研究事業に採択され、その研究事業には世界的な研究教育の第一人者であるイギリスのバース大学のリチャード・ミルズ博士の参画も予定されるなど、本学が取り組んで

きた地域連携活動はグローバルな活動にまでつながってきています。

このような流れを受け、「世界から見たふくしま」「ふくしまから見た世界」という視点で国際交流・国際理解を深め、学生の学びにちなげていくため、本年四月一日に「ふくしまグローバルセンター」を立ち上げました。

これを契機として、海外に向けての「ふくしまならではの学び」を提供できる大学として、国内外での本学の評価を高めるとともに、福島だけでなく、日本各地、世界各地で、その地域を支える人材を育ていけるよう、「知識から実践力」につながる「ふくしまならではの学び」「ここにしかない学び」ができる学びの場にするため、さらに改革を進めてまいります。



理事長・学長

桜田 葉子



全ての大学・短期大学は、大学等の教育研究の質の担保を図るため、学校教育法に基づいて文部科学大臣の認証を受けた評価機関による第三者評価を受けることを義務付けられています。本学は令和5年度、大学・短期大学部ともに公益財団法人日本高等教育評価機構（以下評価機構）による機関別認証評価を受審し、令和6年3月15日付でいずれも「適合」の評価結果をいただきました。

キャンパス視察の様子

機関別認証評価は、大学等の教育研究や組織運営、施設設備などの総合的な状況について7年以内ごとの受審が定められています。前回の機関別認証評価は大学が平成29年度に評価機構、短期大学部が平成28年度に一般財団法人短期大学基準協会（名称は当時）の認証評価を受審し「適合」の評価を受けました。



説明用エビデンス集

## Message

大学LO・福祉心理学科長 日下輝美教授  
短期大学部LO・保育学科長 渡辺雅子教授

今回の「適合」認定に至るまで、本学内では、準備期間を含め約2年にわたり大学、短期大学学部の全学科、事務局の協力のもと、一つひとつエビデンスを積み重ね、報告書作成、資料収集を進めました。併せて、認証評価の本来の目的である本学の主体的な改革・改善の一環として、3つの方針の策定、教育活動のPDCAサイクルの確立、カリキュラムツリーの設定等、教育改善を実施しました。それらの改善結果を自己点検・評価報告書にまとめました。

令和5年度「大学及び短期大学機関別認証評価」評価報告書には、大学、短期大学部ともに、優れた点として、「カリキュラムツリーにより授業科目とディプロマ・ポリシーとの関連を理解しながら体系的に学修できることは、教授法の工夫として評価できる。」との評価をいただきました。また、学生面談に出席した各学科の学生について、評価員の皆さまから「笑顔でしっかりと受け答えをしてくれた」とのお話をいただきました。

また、今回の活動を通し、評価チームが調査の過程において挙げられた「改善を要する点」「参考意見」については、外部の評価基準に基づく自己点検・評価と改善サイクルの定着化が重要であり、第3期中期計画と連動し本学自己点検・評価委員会等により改善への取り組みを継続してまいります。

6つの評価基準は、建学の精神や3つの方針（学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針、入学者受入れの方針）に始まり、教学マネジメントや学生支援、教職員配置、法人の運営及び財務活動など広範囲の領域にわたります。特に大学側が自学の活動について自己点検・評価を行い、その結果を基に改革・改善に努め、質の向上を図る「内部質保証」が重点評価項目として位置づけられています。評価にかかる調査は、大学が作成する自己点検評価書に基づいて書面調査と実地調査が行われます。本学

は令和5年6月末に自己点検評価書とエビデンス集を提出。書面調査を経て、同年10月4日～6日に評価員計7名による実地調査が福島駅前、宮代の両キャンパスで行われ、キャンパスの教育環境の視察や各評価基準に沿った本学関係者との面談、学生面談などが実施されました。実地調査後の審査を経て、本学が全ての評価基準を満たしていることが認定されました。詳細な評価内容や本学の自己点検評価書は評価機構ホームページで公表されています。

## 日本高等教育評価機構

令和5年度  
大学・短期大学機関別認証評価を受審

# 「適合」認定



実地調査後の終了挨拶



評価員との面談に出席した学生たち

今回受審した機関別認証評価は、大学の基本的・共通的な内容で構成されている6つの評価基準が設けられています。

評価基準

- 基準1 使命・目的等
- 基準2 学生
- 基準3 教育課程
- 基準4 教員・職員
- 基準5 経営・管理と財務
- 基準6 内部質保証



**【基調講演】**

講師……………大沼 信一氏 (UCL教授)

**【パネルディスカッション】**

コーディネーター……………柳井 雅也氏 (東北学院大学教授)

パネリスト……………大沼 信一氏

……………門馬 和夫氏 (南相馬市長)

……………渡邊 博美氏 (福島県商工会議所連合会会長)

……………馬場由紀子氏 (株式会社田季野取締役)



**参加学生からの質問**

**Q** 人口減少問題に関連して、人口1人当たりの生産性を上げるという点から活用が期待されるAI技術ですが、その情報リテラシーや活用方法についてどう考えますか？

**A** 教育は重要と考えるが、我々のような年配者よりも幼少期からデジタルに触れている若者の方が活用術に強いと感じている。情報分野をリードする若者が年配の世代をサポートすべきで、そういう社会が進めば素晴らしいと思う。(大沼教授)

**Q** 福島県はとても広く、「浜・中・会津」と地域が分かれています。それぞれの地域の連携は取れていますか？

**A** 割烹の女将という立場から、県内食材を活かして「食」をアピールする仕事を続ける中で、震災を機に「会津」という狭い地域だけでなく、県内各地の生産者とのつながりができ、様々な絆が増えたと感じている。(馬場氏)

**Q** 福島と世界をつなぐ新しいビジネスについて、それを実現できる交通網が必要だと思いますが、小名浜港や水素エネルギーフィールドなどを世界に発信するための交通網についてどう考えますか？

**A** 「交通」という面では、浜通りの弱点と感じている。飛行機や新幹線を利用した移動時間の短縮はエフレイの研究者たちの足に関わる課題でもあるが、答えは模索中。(門馬市長)

**Q** 福島生まれ福島育ちの私は「福島」をととても良いところだと感じています。今回、福島と世界のつながりを知ることができて、福島の一員としてとても嬉しく感じました。

**A** 「福島」は震災前までは世界でよく知られていない地域だった。次の福島を創っていく若者である皆さんには、世界中が福島に期待していることを知っていただき、頑張ってくださいと願います。(大沼氏)



# 新学部開設記念 シンポジウム開催

## ふくしまの未来を担う 人材の育成

持続可能な地域社会の構築に向けて！

令和5年度にスタートしたマネジメント学部地域マネジメント学科の開設を記念し、キックオフイベントとしてシンポジウムを開催しました。英国にある世界屈指の名門大学「UCL (University College London)」の大沼信一教授＝福島市出身＝による基調講演、地元自治体や経済界を代表する皆さんをパネリストに招いたパネルディスカッションを開催しました。当日は行政、教育関係者、学生ら約330名が出席しました。

大沼教授は基調講演で、世界の先進諸国と比較した日本の現状などについて紹介した上で、世界の状況を理解することの重要性と世界で福島県の復興と発展が注目されていることを解説。福島県の復興プランや魅力、ビジネス振興等を踏まえ、「在学中に福島が必要としているものを見つければ、活性化につながる」と学生らにメッセージを送りました。また、新設学部について「社会課題の解決に貢献する人材の育成や地域活性化の役割が期待される」と述べました。

基調講演に先立ち行われた開会式では、来賓の荒井崇福島復興局長、鈴木正晃副知事、木幡浩市長からご挨拶をいただき、桜田葉子学長が新学部への思いを述べました。

は、「福島ならではの学び」をふくしま再生へ」をテーマに行われ、柳井雅也教授をコーディネーターに、大沼教授、門馬和夫市長、渡邊博美会長、馬場由紀子さんがそれぞれの立場から東日本大震災を振り返り、当時の対応や今後の課題について述べたほか、学生ら若者に期待することなどについて意見を交わしました。



**【開会式】**

来賓挨拶……………荒井 崇氏 (復興庁福島復興局長)  
……………鈴木正晃氏 (福島県副知事)  
……………木幡 浩氏 (福島市長)  
学長挨拶……………桜田 葉子 (福島学院大学学長)





4日間の日程で、日英の高校生が「レジリエンス」について意見を出し合ったワークショップをはじめ、英語の授業体験やUCL研究者による講義、大沼教授と学生ボランティアによるキャンパス見学ツアーなどが催された。UCL最終日には、高校生がワークショップの内容を踏まえた発表を行うシンポジウム、福島県レセプションが開催された。レセプションでは、福島高校の生徒3名が「福島の今と未来」をテーマにスピーチを行った。



修了式



大英博物館、国立美術館やバッキンガム宮殿などを巡るなどロンドン中心部を散策。その後のプログラム修了式では、大沼教授から高校生に修了証明書が授与された。



帰国の途へ

30日にロンドン・ヒースロー空港を発ち、翌31日に羽田空港に到着。8月1日に都内での自由行動時間を設け、同日夕に福島駅に到着。

引率教員

福島学院大学  
マネジメント学部地域マネジメント学科 助教 田川 寛之

若者は脳が柔軟で適応能力も高いです。今回の高校生による交流は、自分を表現しつつ相手を理解する力を得る絶好の機会となったと思います。日本も多文化共生社会となりつつあるとはいえ、英語でのコミュニケーションの機会すらまだまだ多いとはいえません。そのため、やはり異文化交流を実践するには、現地に赴き、非母語しか使用できない環境に身を置くしかありません。対面での交流が距離感やニュアンス、背景文化を実感させ、異なる国の人間同士の相互理解の基盤になるのです。当プログラムにおいて「地域社会を持続可能なものにするために必要な何か」を体感した高校生は、いずれローカルとグローバルをつなぐ人材となってくれるでしょう。そして「私も海外に行つて学んでみたい」「学びを地域に持ち帰りたい」といった思いを次の年代が抱けるよう、引き続きお手伝いを続けたいと思います。また、今回痛感したのは、地域が海外とダイレクトに繋がる機会を多く持つことこそ地域の持続可能性を高めるということです。所属学科は地域社会の変化に柔軟に対応できる人材育成を謳っています。学科学生にも非母語コミュニケーションの楽しさを伝えながら語学力向上を促し、人材育成に貢献してまいります。そして、所属学科は地域社会への貢献もミッションの一つです。今回の取組みを好事例とし、いわゆる高大連携の取り組みなどにも踏み込んでまいりたいと考えます。最後になりますが、イギリスでの交流を通じて本学を広く紹介する機会をいただけたことは感謝に堪えません。今後とも交流窓口となるよう努めてまいります。

# UCL-Japan Youth Challenge 2023

本学教員が  
帯同しました

メインテーマ

レジリエンス  
(回復力・再起力)

日英両国の高校生を対象とした英国教育体験サマースクールプログラム「UCL-Japan Youth Challenge」が7月21~30日、英国のロンドン大学UCL (University College London) やケンブリッジ大学などで行われました。福島県からは県立福島高校の生徒3名と引率として本学マネジメント学部地域マネジメント学科の田川寛之助教が参加し、世界を先導する高等教育機関の教育研究に触れたほか、福島県の復興、魅力などを発信しました。同プログラムは、教育活動やイベントを通じた異文化交流などを目的としており、オンライン開催を含め毎夏開催されています。同プログラムの実行委員長を務めるUCLの大沼信一教授にマネジメント学部開設記念シンポジウムでご講演いただいたご縁などから、同プログラムを通して本学・学部の学術交流機会の拡大につなげるため、本学教員の参加が実現しました。現地での活動の様子を紹介します。

プログラムの目的

- グローバルな視点で社会問題に興味を持つ
- 世界トップクラスの大学の講師陣による講義を体験する
- 将来世界トップクラスの大学進学への道が開ける
- 英語をコミュニケーションツールとして使う
- 英国の学生との意見交換を行う
- 自立・自主性の確立、挑戦するマインドの構築



福島発

羽田空港に向けて福島駅を出発。ドバイ経由でロンドンへ。



イギリス着

ロンドン・ヒースロー空港に到着。同プログラムに長く協力する立教英国学院へ移動し、翌日からのプログラムに向けて、参加者がガイダンスを受講した。



立教英国学院



プログラム開会式が行われ、大沼教授が挨拶し参加各校の紹介などが行われた。ランチ後、生徒間交流を目的としたスポーツ交流会が開催されたほか、引率教員を対象としたイギリス流の教員教育のレッスン体験も実施された。



ケンブリッジ大学

23日にケンブリッジへ移動し、異文化交流として高校生らがケンブリッジ大学名物のパンティング(川下り)体験や中心市街地探訪などに参加。24日は元駐アフガニスタン英国大使の講話を踏まえたグループディスカッション、同日午後には、研究者4名による「レジリエンス」に関連した講義を受講したほか、在ケンブリッジ日本人研究者との交流会に参加した。



令和5年度

# 外部評価委員会 開催

〈開催日時〉 令和6年2月7日  
〈開催場所〉 宮代キャンパス

本学の教育研究等の状況について自己点検し、優れている点や改善点などをまとめた自己点検・評価を第三者の視点で検証する「外部評価委員会」が開かれました。同委員会では、大学や組織の運営に関する見識者の方々に委員に委嘱し、本学の教育と研究の質の向上・改善に向けた提言をいただきました。

委員会では、桜田葉子理事長・学長が挨拶の中で、教育の質向上に向けた本学の取り組みを紹介。日下輝美福祉心理学科長が自己点検・評価報告書の概略を説明しました。その後、6名の委員の皆さまからご意見をいただきました。

委員会終盤には、本学が福島国際研究教育機構(エフレイ)の公募研究に応募し、国内私立大学として唯一採択された「福島県浜通りのこどものメンタルヘルス支援」について、研究を主催する福祉心理学科の内山登紀夫教授が研究内容などを紹介しました。



委員長・鈴木弘行氏  
(福島県立医科大学理事)

第一回に比べ、飛躍的に進化を遂げた実感している。一方で新学部が開設され組織が拡大する中、情報共有などが今後の課題になる可能性があるほか、建学の精神や理念等を時代に即してバージョンアップしていくことが今後求められてくるのではないかと考えられる。また、大学の研究面で命とりになりうるのが研究倫理の問題だ。倫理委員会等を設置していると思うが、将来的により良い研究を進めていくためには教員、あるいは学生の教育に研究倫理を少しずつ取り入れていくことが重要になると感じた。地域連携に関しては、新しい学びの場を開拓し、学生のモチベーション、そして地域の課題解決につながるような活動を多く展開していることは素晴らしい。

委員(代理出席)・和田光浩氏  
(福島県農業協同組合中央会副参事)

経営面では、収支の黒字化のために事業改革をする上で経費削減が目がいきがちだが、人を育てる大学の運営では、教育にしっかりと投資をして立派な学生を育て地域に送り出すことが大切。その上で学校経営が成り立つことが非常に望ましい姿であると考えられる。職員採用の面接も担当しているが、学生自身が大学で何を学び、何に興味を持って、それをどこまで深掘りをしたのか。また、それを自ら評価し自分の強みを生かして地域に貢献したいということを自分の言葉で話せる学生、そして、人とのつながりを大事にできる人材を探している。このような点や地域貢献の思想が評価報告書の随所に含まれていると感じた。

委員・五阿弥安安氏  
(株式会社福島中央テレビ取締役会長)

地域連携がより活発になり、積極的に活動していることは素晴らしい。一方で学生、教員の人数など制限がある中で持続可能であることが大切。そのためにはネットワークの構築も大切になる。様々なプロジェクトに取り組み場合、重要度を考慮しながら事業の選択と集中も必要になると感じた。地域の者からすると素晴らしい人材を育て、アウトカムとして学生に地元企業をはじめとする県内の様々な場所で活躍してもらいたい。ただ、自由意志のため難しい課題だが、県外への人材流出を防ぐために、大学や地元企業だけではなく地域全体で若者や女性が能力を十分に発揮できるような環境を整え、福島県の魅力をさらに高めていかなければならない。

委員・日下部達氏  
(東北電力株式会社執行役員福島支店長)

大学・組織運営について、教育研究のみならず、経営の質を高めるため自己点検評価で得られた改善・向上方策を次年度に反映するなど、PDCAサイクルのツールとして活用してほしい。私学経営における実効性のあるガバナンス改革を推進す

委員・渡邊艶子氏  
(福島看護専門学校理事)

るため私学法の一部改正が行われた。政府が経営におけるガバナンス強化を重点課題の一つとして取り上げたこともあり、既に入場企業を中心に先行されている。私学経営においても将来にわたり継続していくためには、社会の要請に応え信頼を得ていかなければならない。そのため、企業と同様に大学にもガバナンス強化が求められる時代になったと感じている。今後、大学の特性を失わないことを前提としつつ、理事会や評議員会など各機関における建設的な協働と相互けん制が同時に達成されるようなガバナンス体制の構築と適切な運用をお願いしたい。

コロナ禍もあったが、地域連携活動など学生主体の活動を見ると学生が楽しくそうに様々な活動に取り組んでいるように感じる。地域を巻き込みながら活動していることから、連携活動の地盤がしっかりしており、その地盤は一挙に出来るものではなく、何年もかけて培ってきたものが今につながっているのだと思う。連携活動が大学内部でとどまらず、地域への貢献が大きくなってきていることや、以前に比べて開かれた大学になったとより強く感じている。

一昨年、昨年と比べ、より学生の学修成果が上がっているのではないかと考えている。

委員・大村雅恵氏  
(天和自動車交通株式会社代表取締役社長)

最近出席した様々な会合で「地域との関わり」と「若者の意見」がキーワードになっている。各団体の取り組みをより活発にしていくなめには、若者の意見を取り入れながら活動内容に見直しをかけることが重要で、そのためには地域との関わりを重視した学びを実践していけるかどうかが大切だと感じている。特に若者の意見、感覚を取り入れるということが今の福島には重要になってきており、

地域連携に関する意見の担い手としての学生の在り方と、学生の意見をどのようにして地域に反映させていくか、福島学院大学のこれからの役割は大きいと考えている。



日下部達氏



和田光浩氏



鈴木弘行氏



五阿弥安安氏



渡邊艶子氏



大村雅恵氏

# 海外の大学との国際交流

## 韓国・建国大学、仁荷大学

令和5年12月6日、桜田葉子学長が韓国の建国大学で開催される韓国地方議会学会・建国大学市民政治研究所主催日韓共同研究関連会議に参加を要請され訪韓致しました。建国大学チョン・ヨンジェ総長から「福島の問題はグローバルなものであり、その解決やそこから得る知恵は世界が共有することである」という理解を示して頂きました。今後の共同研究や福島県への訪問・人的交流についても懇談をしました。同大学で開かれた日韓共同研究関連会議にも出席し、韓国地方議会学会・ヒョンチョル会長から感謝碑の贈呈を受けました。



また、桜田学長は仁荷大学国際関係研究所のリ・ジョンソク所長と共同研究や相互交流に関する覚書を締結しました。今後、共同研究などを通して、世界史に残るであろう福島県の復興の歩みを学術的な学びにつなげる本学の「あふしまならではの学び」を共有し、東日本大震災と原発事故からの復興や



交流会に参加した学生たち

次世代を担う人材の育成を進めていく予定です。

仁荷大学で行われた覚書の締結式に先立ち、仁荷大学のキム・ウンヒ副総長と懇談したほか、同大から要請を受けて行った「グローバル災害と復興ガバナンス講演会」において「地域に根ざす人材育成」「地域で学び、地域に学ぶふくしまならではの学び」と題して福島県の現状や復興への取組みを発信しました。

## 韓国・江原大学

令和6年1月24日、仙台市の東北大学片平キャンパスで韓国の江原大学との交流会が開かれ、同大学、東北大学の学生が日韓の文化の違いなどを

共有し交流を図りました。

令和6年度から本学地域マネジメント学科に着任したコ・ソング教授の仲介で交流会が実現し、地域マネジメント学科の学生13名と教員2名を含む約50名が参加しました。交流会では、進行を務めたコ教授らが日韓の価値観や文化の違いという観点から身近なテーマで学生に質問を投げかけ、日韓の学生がそれぞれ考えを述べるなどして相互理解を深めました。今後も江原大学との交流を継続していく方針です。

## 英国・ペトロック大学

令和6年3月18日、福島県の現状と日本文化を学ぶため英国ペトロック大学の学生らが福島県を訪れ、県内の被災地視察や本学学生との交流プログラムに臨みました。また、同大学と学術・文化交流、共同研究等の交流促進を目的とした覚書を締結しました。交流プログラムは、令和5年度に本学の地域マネジメント学科開設を記念して開かれたシンポジウムにて講師を務めていただいた University College London の大沼信一教授（本学特別招聘教授）の仲介で実現しました。

覚書締結式は21日、歓迎レセプションの席上で行われ、ペトロック大学のキャロライン・チッパーフィールド高等教育ディレクターと大沼教授が同席の下、桜田葉子学長が覚書に署名しました。18、20日は、両大学の学生が英語で

の大学紹介やゲームに取り組むなどして活発に交流したほか、福島学院大学がアテンドした福島県担当者による復興の状況と取組についてのレクチャーを聴講。学生らが福島ロボットテストフィールド（南相馬市、東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町））を視察するなどして、震災・原発事故後の福島県について理解を深めました。また、本学宮代キャンパスの体育館を会場に剣道体験が行われ、英国の学生が日本文化に触れました。



大沼教授（中央）同席の下、覚書を締結した桜田学長



英語で交流した本学とペトロック大学の学生たち

# 「福島県浜通り」

## こどものメンタルヘルス支援」の研究・事業内容等について

震災後に開始し、現在まで継続して行ってきた原発事故後の子どもと親のメンタルヘルスの研究が、福島国際研究教育機構「FIREI（エフレイ）」の研究対象として選ばれ、さらに調査研究を進めることが可能になりました。

福島国際研究教育機構（FIREI）とは原子力災害に見舞われた福島県が創造的復興を達成するとともに、原子力災害に対する備えとして国際的な貢献をしていくために、「福島を経験」から得たデータや知見を集積・分析し、復興や防災・減災に繋がる知見を生み出し、社会実装を進めることを目指すための組織で7つの省庁が関与する国の組織です。

この調査は私が福島大学に勤務していた2011年に開始し、大正大学、本学と3つの大学勤務にわたって継続してきました。

この研究の内容を紹介すると主に乳幼児検診のデータと小学校でのアンケート調査をもとにし、これまで県内の子どももおよそ3800人の発達や親のメンタルヘルスへの影響について研究を進めてきました。

この研究が福島国際研究教育機構「FIREI」の公募研究として採択され、国の内外の研究機関と協力して、さらに実態把握やメンタルヘルス向上に向けた支援の仕組みづくりを進めることになりました。

同じ分野で採択されたのは東京大や東北大、福島大、県立医大などで、私立大学では、本学が国内で唯一採択されました。さらに浜通りに研究交流拠点を設けることにしています。

具体的には今後やることは①乳幼児健診においてデータ収集し分析すること、②小学生を対象にアンケート調査を



福祉心理学科教授 内山登紀夫

施すること、③地域の特性を調べること、④浜通りの親子へのメンタルヘルス支援のためのプログラムの開発、実装、⑤被災地域の親子やその支援者のためのサロン・交流の場の設置、⑥正確な情報発信と正しい知識の普及啓発を行っていきます。

今後6年に及ぶ長期の研究になります。十分な成果をあげて地域貢献につなげたいと願っております。本学教職員、院生、学部生、OB/OGの方々、関係者の皆さまの協力をお願いします。

# FIREI

# エフレイ公募研究に国内私立大学で唯一採択

私の専門は財政学、地方財政学、社会保障論です。国や市町村の収入と支出の分析をします。国も市町村も住民サービスを提供し、そのために必要な税金や保険料を住民から徴収しています。住民が受けている行政サービスが本当に役に立っているか、お金が無駄なく使われているかなどについて分析します。

行政サービスは、福祉、教育、土木、公衆衛生、産業振興、災害復興、防衛などあらゆる分野に及びます。そのため、国や市町村の収入と支出の分析と言いつても、お金の勘定だけをするのではなく、現実の制度がどうなっているかを知らなければなりません。福祉制度がどうなっているか、道路の建設はどうなっているか、教育はどうなっているか、などを財政学では勉強します。

私は幼いころから、年金や医療、社会福祉など社会保障に関心がありました。私の家は、町の中心部で大きな店を経営していましたので、町の大金持ち、製材工場で働く人、高齢者、体に障害のある人等いろいろな人が来ました。幼いころから、その人たちの生活

を見て、社会保障は重要だと思いうようになりました。

年金も医療も社会福祉・児童福祉・介護制度も充実すればするほどに素晴らしいものです。一方で、それだけでよいのかという心配もあります。というのは、社会保障が充実するほどに、それを賄うための税金や社会保険料も高くなるからです。

税金や社会保険料を支払った後の手取り所得が低くなると働く意欲にどう影響するのか、企業の投資意欲にどう影響するのか、貯蓄意欲にどう影響するのかまで考えにいかれて、社会保障のあり方を考える必要が出てきます。例えば、年金支給開始年齢は、人々が何歳まで働くかに影響します。財政学では、こういうことについても分析します。

また、社会保障は、通常は貧しい人に手厚く制度が設計されますが、本当にそうなのかという、分析もします。このように、制度がどのようになっているだけではなくて、制度が及ぼす効果を分析するのが財政学です。

面白かったのは、財政制度の国際比較です。例えば、社会保障の国際比較

ですと、年金や医療、福祉制度について、日本の制度と各国の制度を比較して、日本の制度を改善する参考にします。日本と同じように経済が発展したスウェーデン、フランス、イギリス、ドイツ、イタリア、アメリカなどの制度がどのようになっているのかを勉強します。

スウェーデンは、人口1千万人ほどの小さな国ですが、イケア、ボルボなど世界的にも有名な企業がいくつもあります。財政制度も大変シンプルで合理的なので、例えば、年金や医療制度を学びに外国から多くの人が来ます。イケアの家具のデザインもシンプルで合理的ですが、それが財政制度にも表れています。

スウェーデンと正反対なのが、フランスです。フランスの年金や医療制度は、パッチワークのように、昔からのいろいろな制度を接ぎ合わせてつくられています。政治的な妥協の産物です。はじめて研究した時は、よくこれを持っているな、と思いました。しかし、地下鉄職員の年金支給開始年齢上げ反対のストライキを国民が支持することにも見られるように、ある団体の権利が損なわれるときは、国民全体が反

対するという土壌があります。まだフランス革命前夜なのだと言う人さえいます。そのような社会では、抜本的な改革よりも、妥協を積み重ねて制度を作っていくことになります。

このように、各国の制度には国民性がよく出ていて、海外旅行が趣味の私には大変楽しく学べました。

福島学院大学で、今、最も取り組みたい研究は、東日本大震災、津波、原子力発電所事故から、福島県、県内市町村がどのように復興してきたかを、財政学の分野から研究することです。市町村ごとに事情は違いますが、やりがいがあります。

また、全国の県や市町村のなかには、少子化対策や災害対策などにおいて、人口知能やビッグデータなどを利用して、あるいは目からうろこのアイデアをもとに、先進的な政策を実施しているところがいくつもあります。そういう政策を学んで、福島県に応用したらどうなるかなど、学生と共に考えたいと思います。

新たな挑戦です！



教授 木村 陽子 YOKO KIMURA

- 【職歴】
- 1984年 大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (厚生省所管特殊法人) 社会保障研究所研究員
  - 1987年 奈良女子大学家政学部助教授
  - 1993年 奈良女子大学生活環境学部助教授
  - 2000年 奈良女子大学生活環境学部教授
  - 2000年 地方財政審議会委員 (常勤)
  - 2010年 (財)自治体国際化協会理事長
  - 2014年 (公財)日本都市センター参与、大阪ガス監査役 (社外)
  - 2023年より現職

私は令和4年3月末まで、公務員の研究員として働いていました。職場内の配置転換も含めると異動は11回を数え、研究員としては多かった方だと思っています。食品に関する微生物や伝統食品の試験研究のほか、食品廃棄物の処理の研究にも携わり、県内企業様や大学様との共同研究も経験しました。事務職的な仕事に就いたこともありましたが、定年退職まで「研究職」という肩書で、好きな仕事を続けることができて幸運だったと思っています。

「定年退職」の文字が気になりだした令和3年の1月に、突然、以前共同研究をした大学の先生から、高専の非常勤講師の打診がありました。手続的にはかなり厳しい状況の上、移動距離もかなりあったことから、一度は辞退したのですが、大変お世話になった先生でもあり、受けることとしました。

私は、もともと「教師になれるはずがない。」と思っていた人間で、セミナーの講師などは数えきれないほど経験しましたが、「人の評価を伴うようなことは無理。」と考えていました。受けたものの、教師としてどう進めてよいか悩んでいるときに、高校時代の恩師の1年生の最初の授業のときの言葉を思い出しました。

「俺は人を導くようなことはできない人間だが、『先に生まれた』という

だけで『先生』をやっている。自分の知識を伝えることしかできない。」

その先生は教育学部を出た教師ではなく、別な仕事をしていて縁あって高校の化学の先生になった人でした。その先生の授業はとても厳しいもので、先生の質問に答えられないと、教室の後ろに立たされました。結果的には、その後の人生を決めたきっかけになった先生でもあり、忘れられない人です。

この言葉を思い出した時、「私も『先に生まれた』というだけの先生」で行動しよう」と考えるようになり、自分のやりたいようにしようと思えるようになってきて、ずいぶん楽になりました。担当したのは、「生物資源化学」という講義でしたが、新しい領域で、教科書らしいものもあまりなく、自分が知っていることと最新のデータを組み合わせる講義内容を組み立て、後半は、実例として企業様と共同研究した食品廃棄物処理の実証試験の話をしました。

新型コロナウイルスによる感染症が蔓延した時期でもあり、何度かリモート授業も行いましたが、対面で授業を行った日の終了後、一人の学生が近づいてきてこんなことを言っていたのです。

「先生が実証試験を行った場所に、小学校のころ社会科見学で行きました。機械も見て、すごいと思いました。

それで、将来そういう仕事がしたくてこの学校に決めたいんです。」

私は大変うれしく思うとともに、「人の人生に影響を与えた」という事実に感動しました。

学生の一言で、生ごみと格闘し苦労した研究の日々が一気に報われたような気がしました。また、ここで先生として学生に教えなかったら、こんな経験はできなかったのだと改めて思いました。

そんなことがあって、もし次も声がかかったら快諾しようと思っていたところに再度の打診があり、是非、という感覚で受けました。当然ですが、2年目は覚悟ができていたということもあり、余裕を持って対応することができました。

そんな中、以前上司として同じ職場にいた桑田先生から、非常勤講師のお話がありました。仕事は多忙を極めていたのですが、高専での体験もあり、受けることとしました。

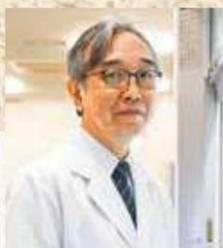
やっと自分の専門に近い講義を受け持つことができたのですが、受講生が少なかつたことから、それなりに苦労しました。しかし、教科書に書いているような話をするよりも、自分の体験談や実例などを話した時の学生の反応が面白く、この時初めて、「自分の経験も生かせるんだ。」と知り、先生という仕事も続けてみたいな、と思うようになりました。

そして、今の私があるわけで、こちらで働かせていただくようになって、1年がたとうとしています。あわただしい毎日ですが、本当に学生の明るさが救いです。

私は普段、学生たちに「自分はどうか、が大切だ」と話しています。その先には、「自分はどうか考えるか。」があつてほしいとも言っています。周りが方向性を決めるのを手伝う同伴型から、自分で決めたことを周りが支援する形の自走型に変わってほしいからです。

国及び特許庁が推奨する、「経営をデザインする」という考え方、いわゆる「価値デザイン経営」というものがあります。未来の会社を思い描くことで、何をすればよいかを考える、という手法ですが、それは「人」にも当てはめて考えることができず、どんどん変わっていく世の中で、未来の「なりたい自分」を想像し、それに向かって努力するということは、言うのは簡単ですが、なかなか難しいことです。短期大学ではそれを考える時間は2年しかありませんが、時間を有効に使い、自分の本質をとらえ、将来の目標を立てることは不可能ではありません。

私は、学問的な知識以外にも、こういった知識を伝えることで、学生たちと共に成長していきたいと考えています。



教授 池田 信也 SHINYA IKEDA

山形大学 農学部 農芸化学科卒業 農学士

昭和62年4月 福島県庁入庁  
福島県会津若松工業試験場 食品部食品化学科配属  
(現福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センター)

令和3年10月 福島学院大学 食物栄養学科非常勤講師

令和4年4月 福島学院大学短期大学部 食物栄養学科 教授

学生が調理、配膳に協力

6月



11月



第1、2回ともに、会場に隣接する給食管理実習室を調理場として使用。食物栄養学科の当時2年生が野崎総料理長や柿迫料理長、スタッフの皆さんから指導を受けながら、前日の仕込みや当日の調理補助、盛り付け、料理の配膳に取り組みました。



6月



11月

写真撮影 TOKIMEKIPHOTO 古閑 マナミ

柿迫料理長に客員教授を委嘱

本学の教育の質向上へのご協力をお願いするため、柿迫料理長に客員教授を委嘱させていただきました。福島民報社の芳見弘一社長立ち会いの下、桜田葉子学長が柿迫料理長に委嘱状を手渡しました。



食と健康について講演



挨拶する芳見社長

会場では、各回ともに福島県立医科大や福島県、JAグループ福島の関係者の皆さんによる講演会も行われ、食や健康に加え、食料安全保障やGAP（農業生産工程管理）の取り組みなどについて、参加者の皆さんや学生らが理解を深めました。講演会に先立ち行われた開会式では、芳見社長、桜田学長が挨拶を述べました。

【講師】



第1回

第2回

- 福島民報社
- 福島県立医科大学
- 福島県
- JAグループ福島
- 福島学院大学

# ふくしまを育む「あしたの食卓」

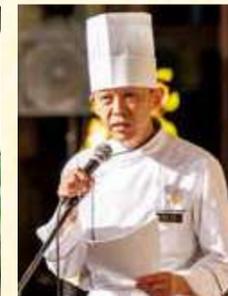
地産地消健康レシピを提供する1日限りの特設レストラン「ふくしまを育む『あしたの食卓』」が令和5年6月と11月に本学宮代キャンパスで行われ、来場者に一流料理人によるフルコースが振る舞われました。

福島民報社の主催、福島県と福島県立医科大学の共催、JAグループ福島の特別協賛により、福島民報社と福島県立医科大学が取り組む「健康ふくしまプロジェクト」の一環として、食を通じた健康意識の向上や福島を担う次世代の人材育成、県産食材を使用した料理を提供して県産食材の安全・安心とおいしさを再認識してもらうことを目的に開催されたものです。6月は日本料亭「分とく山」野崎洋光総料理長による日本料理、11月は結婚式場やレストランを運営する「八芳園」の柿迫太陽料理長による洋食が振る舞われました。

本学は特設レストランの会場を提供したほか、食物栄養学科の学生が前日の仕込みや当日の調理・配膳補助に参加し、それぞれの総料理長やスタッフの方々からたくさんのアドバイスをいただき、学生にとって多くの学びと貴重な経験を得た機会となりました。当日の様子や提供された料理等を写真で紹介いたします。



野崎総料理長



柿迫料理長

特設レストランで料理の腕を振るった野崎総料理長と柿迫料理長。川俣シャモや福島牛、福島県産野菜をふんだんに使用した料理を提供していただきました。



会場となったのは、本学宮代キャンパスの「スペイン広場」。スペイン・アンダルシア地方の街並みを模した広場で、異国情緒溢れる開放的な空間で食事をお楽しみいただきました。

6月  
野崎総料理長の献立



- ・アスパラ豆腐 荳胡麻あん掛け
- ・蕃茄帆立射込み 生姜あん
- ・川俣シャモ ナッツだれ掛け
- ・馬鈴薯スープ 醤油ゼリー
- ・破竹酥挟み
- ・海老ブロッコリー最中 絹さやペースト
- ・胡瓜すり流し 蓴菜 新生姜
- ・メープルサーモン 荳胡麻ドレッシング掛け
- ・福島ローストビーフ 黄身おろし フリルレタス 翡翠茄子
- ・雑魚椎茸ご飯
- ・長芋 胡瓜 味噌ヨーグルト漬 キャベツ漬
- ・なめこ ほうれん草
- ・ブロッコリー餅 白玉きな粉黒蜜掛け

11月  
柿迫料理長の献立



- ・川俣シャモのアンサンブル/ 苺酒ソーダいちご
- ・会津小菊南瓜とアーモンドのスープ/ 純米吟醸 神谷
- ・阿武隈川メイプルサーモンのミ・キュイ/ 甲州
- ・福島牛のポアレ 牧草の香り/ 純米吟醸 神谷 ぬる燗
- ・林檎のモンブラン/ ロハ酒 純米生酒
- ・生米パン、もち麦パン/ 珈琲

〇〇〇〇 **よい仕事おこしフェア実行委員会** 〇〇〇〇  
(福島信用金庫)

協定締結 令和5年2月  
(令和2年12月)

全国の信用金庫で組織する「よい仕事おこしフェア実行委員会(事務局:城南信用金庫)」との連携事業の一環として、福島信用金庫の協力の下、福島市飯野町の巨大ニンニクを使用したクラフトビールを開発しました。商品は令和5年10月にお披露目されました。



商品名は「UFOのエレphantガーリックエール」。使用されているニンニクは、生産農家の皆さんと学生が連携してブランディングに取り組んできた商品で、令和4年度から本格的な流通、販売が始まりました。今回は同実行委員会の仲介で、クラフトビールの製造販売などを行う株式会社大鵬(東京都)に製造してい

ただきました。東京都で行われた仕込み式には、城南信用金庫の川本恭治理事長、福島信用金庫の樋口郁雄理事長、ニンニクを生産する「UFOのエレphantガーリックとなかまたち」の阿部好克代表、木幡浩福島市長、本学の桜田葉子学長が出席しました。



〇〇〇〇 **NPO法人結俱樂部** 〇〇〇〇

協定締結 令和2年7月

結俱樂部所属の「UFOのエレphantガーリックとなかまたち」が福島市飯野町で栽培している巨大ニンニク「UFOのエレphantガーリック」のブランド化や商品開発、販路開拓などに取り組んでいます。学生が収穫や仕分け作業などに取り組みました。巨大ニンニクは、福島市内のスーパー「いちい」や郡山市のうすい百貨店などで販売されたほか、巨大ニンニクを使用したクラフトビールも製造されました。



〇〇 **浪江町** 〇〇

協定締結 令和3年3月

無印良品を運営する良品計画の協力で、学生が浪江町の酒蔵の酒粕を使用した6次化商品を考案・発売するなどの連携事業を実施してきました。また、同町の賑わい創出を目指して令和3年度から始まったコスモス畑の整備にも取り組んでいるほか、学生が同町でのフィールドワークやワークショップに臨み、同町の将来や地域課題などについて町民の皆さんと意見を交わしました。



〇〇 **伊達市** 〇〇

協定締結 平成28年7月

伊達市企業立地セミナーへの講師派遣などを通して連携しているほか、令和5年度は企業3社を招いた企業説明会を実施。人口減少や都市部への人材流出等で働き手の確保が難航する地方企業の採用力向上にも寄与しようと、同説明会では学生の企業理解だけでなく、説明を受けた学生の意見を企業担当者にフィードバックする時間を設けるなどした取り組みが行われました。



ACTIVITY REPORT

福島学院大学 **地域連携センター** 活動報告

本学の地域連携拠点「地域連携センター」は平成31年度の設置以来、多くの企業・団体との協働による多くの事業を展開してきました。今後も「地域に根差し、地域になくてはならない大学」を掲げ、連携事業を通じた地域貢献と大学資源の「見える化」を図っていきます。

〇〇〇〇 **福島県教育委員会** 〇〇〇〇

協定締結 令和4年11月

福島県の幼児教育の質向上や幼少教育の接続性強化などを目的に福島県教育委員会と連携協力に関する協定を締結し、保育者養成機関である本学の教育・研究の知見を活かした活動に取り組んでいます。令和5年度は連携事業第一弾として、県内の保育者、小学校・特別支援学校教員を対象に、保育施設や教育現場で課題となっている発達障害などをテーマとした「配慮が必要な幼児・児童のあり方を考える研修」、「子どもの心の発達や成長と大人のかかわり方を考える研修」を各3回開催しました。

研修会では、福祉心理学科の内山登紀夫教授、佐藤則行講師、こども学科の佐藤佑貴教授、本学の岸良範客員教授が講師を務め、発達障害のある子どもへの支援や子どもの心理、子育て支援などについて解説しました。



〇〇〇〇 **福島県立南会津高校、南会津町** 〇〇〇〇

協定締結 令和6年3月

南会津町、南会津高校と高大官連携に関する協定を締結しました。協定は3者の連携により学校教育の振興、地域社会の発展及び人材育成に寄与することを目的としています。

締結式は宮代キャンパスで行われ、同町の渡部正義町長、同校の高橋喜智校長(締結当時)、本学の桜田葉子学長が協定書を交わしました。

3者それぞれが有する特色と強みを生かし、教育・研究や学習支援、相互の教職員による情報交換と共同研究などで連携するほか、本学の講義等を受講した生徒が入学した際の単位認定、連携を活かした入学者選抜の実施などを検討しています。また、同校の生徒が南会津町をフィールドにした探究活動「南会津学」に取り組んでいることから、同探究活動と関連した生徒と学生によるフィールド調査なども想定しています。



## その他の地域連携活動

### 福島市市街地整備課

#### JR福島駅前にデザイン画

再開発事業が進むJR福島駅東口の賑わい創出を目指し、工事現場の仮囲いを彩る装飾をデザインしました。「工事中の駅前にフォトスポットを」との提案から始まったプロジェクトには、学生と福島東稜高校の生徒が参加。約5か月間にわたり、デザインを検討するワークショップや原画制作などに取り組み、令和5年8月26日に5つのデザインがお披露目されました。



### 選挙啓蒙ワークショップに参加

福島県選挙管理委員会と事務局の福島民報社が実施するワークショップを実施しました。選挙イメージなどについて学生が意見を発表・共有した上で、選挙関係者へのヒアリングなど、今後のワークショップの取り組みを確認しました。令和5年度中にワークショップに参加した県内の学生による報告会実施などが予定されています。



### 磐梯町の観光PRへ施策提案

令和5年7月、磐梯町の佐藤淳一町長、ばんだい振興公社の皆さん、青山学院大学大学院生と本学学生が、史跡慧日寺などを活用した観光施策提案に向けたワークショップを行い、同9月に学生らが磐梯町内でフィールドワークを実施しました。同12月には佐藤町長や同振興公社の皆さんに、これまでの活動を踏まえた施策提案プレゼンテーションを行いました。今後は提案内容を深掘りし、施策を具体化していく予定です。



### 経営者と学生が意見交換

福島県中小企業家同友会から「大学生との意見交換の場を持ちたい」との要望をいただき、ワークショップを全2回実施しました。ワークショップでは、学生が取り組む地域連携活動の報告をはじめ、経営者の皆さんが学生に大切にしていたことや時事問題を絡めた企業広報などをテーマに、経営者と学生がそれぞれの視点から意見を交わしました。また、都市部と地方の経営者の違いなどについても講話いただきました。



### 福島地域酒米研究会

協定締結  
令和3年4月

福島産酒米を使用した日本酒のブランディングに取り組んでいます。福島市で毎年開催されている日本酒販売会では、学生らが同研究会会員の皆さまとともに販促や売り場づくりなどに取り組み、地元産の日本酒をPRしました。



### 株式会社いちい

協定締結  
令和2年12月

情報ビジネス学科の「経営概論」で連携授業を実施し、授業の一環として学生がいちい本社を訪問しました。同社などが取り組む世界初の「ベニザケの陸上養殖」についての研修を受け、地域企業の新規事業立ち上げなどについて解説いただきました。



### 土湯温泉観光協会

協定締結  
平成28年2月

土湯温泉の夏イベント「ミズベリングつちゆ」のイベントを学生が企画・運営しています。4年目となった令和5年度は、カフェや緑日に加え、土湯温泉名物のこけしをモチーフにしたオイルモーションを制作するワークショップなどを開催しました。



### ふくしま三大ブランド鶏推進協議会

協定締結  
令和4年9月

令和5年7月に三島町で開催された「ふくしま三大鶏フェス」に学生らが参加しました。学生らが商品の企画、試作を重ねてきた「三大鶏のトリプルサンド」を販売し、好評を博しました。また、同年12月には宮代キャンパスで三大鶏の食べ比べ試食会が開かれ、学生に三大鶏の焼き鳥が振る舞われたほか、業者向け試食会では、焼き鳥に加えて鶏の丸焼きと鶏芋煮も提供され、飲食店や旅館関係者の皆さんにも三大鶏の魅力を発信しました。



### AC福島ユナイテッド

協定締結  
令和3年12月

昨年度に引き続き、福島学院大学認定こども園で福島ユナイテッドFCのスタッフを講師にお招きし、「運動遊び」を約30回実施しました。年長園児が遊びを通して走ったり跳ねたり、ボールを使った運動を通して、基本的な体の動かし方や運動の楽しさを学びました。



### 飯坂温泉観光協会

協定締結  
令和元年6月

飯坂温泉PRキャラクターの温泉娘「飯坂真尋ちゃん」の声優によるトークライブの開催準備、当日運営に学生が携わりました。また、同温泉観光協会主催の「飯坂温泉 日本一の桃祭り」でも学生が運営協力しました。



# メディア懇談会

福島学院大学が目指す“大学の見える化”を図るため、報道関係者の皆さまを本学にお招きし、大学の取り組みや教員の研究を紹介させていただいております。全8回の懇談会を開催いたしました。



第5回  
令和5年10月27日  
研究発表者 黒石いずみ  
(地域マネジメント学科教授)



第1回  
令和5年4月28日  
研究発表者 渡邊 一代  
(こども学科教授)



第6回  
令和5年12月1日  
研究発表者 寺田 一薫  
(地域マネジメント学科教授)



第2回  
令和5年6月30日  
研究発表者 浅野 清彦  
(地域マネジメント学科教授)



第7回  
令和6年1月26日  
研究発表者 伊藤 裕顕  
(地域マネジメント学科准教授)



第3回  
令和5年7月28日  
研究発表者 伊藤 利恵  
(福祉心理学科講師)



第8回  
令和6年2月22日  
研究発表者 池田 信也  
(食物栄養学科教授)



第4回  
令和5年9月29日  
研究発表者 茨木 瞬  
(地域マネジメント学科講師)

## 福島県主催イベントで社会貢献活動

令和5年10月、「ふくしまゼロカーボンDAY!2023」のメインイベント(郡山会場)に福祉心理学科・齊藤ゼミ内のチーム「レモネードスタンド@「L」」が出店しました。レモネードスタンドは、小児がん治療、研究支援のためにレモネードの売上に寄付する社会貢献活動です。同イベントでは寄付に加え、学生がゼロカーボンの理念に賛同しリサイクルカップとバイオマスストローを使用してレモネードを提供しました。



## 乳がん啓発イベントにボランティア参加

令和5年10月、福島県健康づくり推進課主催の「ピンクリボンマルシェ」に福祉心理学科の学生5名がボランティアとして参加し、来場者にチラシや啓発資料を配布するなどして、乳がん検診の早期受診を呼びかけました。



## 被災地フィールドワークに福島大学と合同参加

本学からは地域マネジメント学科1年生5名が参加し、主催の桜美林大学と福島大学の学生らとともに双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館や、震災遺構である浪江町立請戸小学校などを視察。また、活動を振り返るディスカッションも行われ、学生が浜通りの現状や復興に関して理解を深めました。



## 福島駅前でイベントブースを運営

令和5年10月、福島市商店街連合会青年部主催の「まちなか子ども王国」に福祉心理学科、こども学科、保育学科の学生計16名が参加し、サッカーゲームや輪投げ、魚釣りゲームのブースを運営しました。当日は約1万5千人の来場があり、学生が多くの子供たちと接し、学びにつながる貴重な機会となりました。



## 学科の学びを活かしたブースを出展

令和5年6月、「街なかちびっこフレンドパーク(福島市都市計画課主催)」に3学科の学生約30名が参加しました。福祉心理学科は障がい者スポーツ・ボッチャ体験、食物栄養学科はオレンジオイルと発泡スチロールを利用したスタンプづくり、情報ビジネス学科(募集停止)は間違い探し・大声コンテストのブースを設置。各学科の学びを活かしたブースは、多くの来場者でにぎわいました。







本大学及び大学院は令和5年度(財)日本高等教育評価機構から高い評価をいただきました。



本学短期大学部は令和5年度(財)日本高等教育評価機構から高い評価をいただきました。



福島学院大学は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。



# 福島学院大学大学報

<http://www.fukushima-college.ac.jp>

**VOL. 35**

発行

**福島学院大学**

〒960-0181 福島県福島市宮代字乳児池1-1  
TEL 024-553-3221 FAX 024-553-3222

©2020 Fukushima College.

編集  
発行日

福島学院大学 入学広報課  
令和6年5月31日



ホームページ



YouTube



Instagram